
この世の最果てで何を想う？

岳人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この世の最果てで何を想う？

【Nコード】

N9865C

【作者名】

岳人

【あらすじ】

2007年、秋。どこにでもいる、疲れた大人である主人公。心も疲弊し、休みの為に無心に仕事をこなす彼に待っていたのは突然の死！？しかし、遠のいていく意識の中、出会った不思議な存在。彼女は言った。「お前に完全な死までの猶予をやろう・・・」彼に与えられた死までの72時間の物語。・・・処女作につき、読みづらい場面も多々みられると思いますが、お付き合いいただければ幸いです。

序章：72時間前の日常・・・（前書き）

小説書くのは、生まれて初めてです。

即興に近い感覚で、書いているので読みづらい場面もあるかもしれませんが。

ご了承ください。

序章：72時間前の日常・・・

「・・・答えを聞かせてもらおう・・・」

全ての始まりと終わりの共存する暗闇の中、見る者を見透かすような澄んだ蒼い瞳で視線をこちらに向けながら彼女は口を開いた。

彼女に嘘は通じないだろう、でも焦る気持ちは無い。

俺の答えは決まっている。迷いは微塵もないのだ。

俺は、真っ直ぐ彼女を見据えて答えを告げる・・・

・・・72時間前・・・

終わらない仕事、少ない給料、時間も金も無く、気がつけば隣にいた女もいなくなっていた。

「はぁ・・・」

思わずため息が漏れる。

自分も今年で30だ、もう若さも失った。

何のために生きているのか、誰のために働いているのか。

俺の人生は何なんだ？

答えの出ない自問自答を繰り返しながら、タバコに火をつける。

煙を燻らせながら、ボーッと空を見上げた。

・・・俺が今死んだら、誰か泣いてくれるだろうか？
ふと、ろくでもないことを思いついた自分に嫌気が差した。

「病んでるな・・・疲れてるのかな。」

吸っていたタバコの火を消し、立ち上がる。

「さて、仕事するか」

考えると、ろくでもないことばかり思いつく。
今は無心に仕事をこなそう。

そして、来週こそ休もう。

俺には休息が必要だ。

でないと、いい加減病気になりそうだ。

この際、多少仕事を放ってでも休みをとるべきだ。

自分に言い聞かせつつ、黙々と仕事をこなした。

第一話 志半ばの死

ここまで走り抜けばゴールだ。

そう自分に言い聞かせ、仕事に取り組む。

「この現場なんですが・・・」

俺に拒否権はない。だが、当然ながらミスも許されない。

納期が間に合うはずもなく、客のクレームにも変に慣れていた。

悪循環だ。このままではいけない。

ただ、一つ一つの仕事を着実にこなしてから次にいきただけなんだ。

「今はとりあえず、やり抜こう。」

憂い無く休む為に、一段落つくまでは暫く働き続けよう。

それまでは、休みは返上だ！

俺は無心に仕事に臨んだ。

・・・三週間が経ち、たしかに仕事は進んだ。

だが、思っていたほどは進んでいない。

ここがゴールだと思ったところまで走り抜いたその時に、実はゴールがその先にあったと知った時の気持ちはきつとこんな感じなんだろう。

「一服でもするか・・・」

タバコに火をつけ、煙を空に向けて吐き出す。

心が折れそうだ。許されるなら膝から崩れ落ちて、好きなだけ眠りにつきたい。

そんなことが許されないことはわかっているが。

「・・・さてと、やるか」

意を決し、立ち上がる・・・すると違和感が!?

世界が歪む・・・

立ち上がれない、後頭部がふわふわする。

頭痛もしてきた・・・吐き気もする。

脂汗が出てくる。音が遠くなっていく・・・

耳鳴りが始まり、景色がセピア色に・・・日の光が世界を覆った瞬間、記憶が途切れた。

第二話 一完全なる自由へ不自由

・・・あれから、どれだけ経ったのだろうか？

目の前に広がる暗闇。そこには一縷いちるの例外すら存在しない。

俺は自分のおかれた状況が把握できずに、漂っていた。

記憶が途切れたと思った、次の瞬間にここにいた。

音も光もない、おそらく時間や重力も存在しない。

「・・・自由だ。」

それが、口を開いて最初に出た言葉だった。

一切の物理法則も存在しない、枷かせから開放された世界。

『だが、手に入れた筈の完全な自由は進みたい方向に進むどころか立ち上がることもままならぬ不自由だぞ。』

何もいない筈の世界で、声がする。

いや、声が聞こえたというよりは想いの波が触れてきたような・・・

。

振り返ると、そこには声の主らしき影が。

宝石のように澄んだ蒼い瞳、耳元まで裂けた大きな口。

角に翼、尻尾・・・緋色に輝く鱗。

「竜だ。」

そこには、竜がいた。

子供の頃に見た絵本に登場したそのままの姿だ。

「そうか、これは・・・」

『”夢”か？当たらずとも遠からずだな。』

なっ！？思考を読まれた？

『驚くことはない、ここはそういつところだ。』

『・・・むしろ、ここで自我を保てる人間の方が珍しいぞ。お前の名はなんというのだ?』

「^{たかし}天だ。^{すわ}諏訪 天」

『ほう、名まで言えるとはな。これはまた珍しい。ところで、お前は今死んでいる事に気が付いているか?』

!なんだと?・・・いや、待て。どうせこれは・・・。

『夢ではないぞ!お前は死んでいるのだ。このままでは精神すら消えて貴様の存在は完全に初期化される。』

「な、何を?」

『ここで逢ったのも何かの縁だ。我になら貴様の状況を解決できなくもないぞ?』

目の前で、何やら俺に提案をする竜。

だが、俺はまだ状況を飲み込めずにいた・・・。

第三話 契約成立！？

『さすがに、いきなり全てを理解するのは無理か……。』

竜は眉間にしわを寄せながらこちらを見据える。

『理解は後でも構わぬ、お前に完全な死までの猶予をやるうと言っ
のだ。我と契約しろ。』

「契約？」

さっぱり意味がわからない。

夢なら、早く覚めて欲しい。やらなければいけない仕事如山積みなのだから。

こちらを見ていた竜の口元が緩む。

『……フツ、我と契約すればすぐに目覚めるぞ？』

「……全く、変な夢だな。わかった契約するよ。」

俺は考えもせず、即答した。

『契約は交わされた。では、ひとまず帰るがよい。』

そう竜が言つと、何か物凄い力で後ろに引き戻された。

体に枷かせと感覚が戻ってくる。

……今思えば、あの時違和感を感じていたんだ……。

「あれ？」

気が付くと、喫煙所のある会社の中庭に一人でいた。

「さあ、仕事だ。」

俺は、足早に席に戻って仕事を続けた。

その日の夜、俺は疲れから横になるとすぐに眠りに落ちた。

「なんだ？ 契約の説明が残っていたか？」

『そう、邪険に扱うな。お前に”契約者”としての注意事項を説明したくてな。』

そこには、白昼夢に登場した竜がいた。

「注意事項？ 契約して・・・目が覚めて。それで終わりじゃないのか？」

『説明するより、こうする方が早いから・・・』

竜がそう言つと、竜の体に緋色の紋様が浮かび上がる。

よく見るとそれは、何かの文字のようだ。

『これは封印であり、結界だ。これがあるから、我はここから動けず且つ存在し続けられるのだ。』

「・・・それで？」

『お前は一度死んだ。肉体と精神が別たれたお前はそのままでは精神も初期化され完全に消滅するところだった。だが、戒めを持つ我と連結することにより肉体と精神を繋ぎ直したのだ。』

「そうか、なるほど連結してな。・・・連結？」

『そうだ、つまりこうだ。』

そう竜が言つと、今度は俺の体に竜と同じ紋様が。

「これは？」

『契約により繋がった我とお前は、文字通り一心同体。・・・言つなれば我らの絆と言ったところか？』

どうやら、こいつなりのジョークらしい。

だが、あまり絡む気もしなかった。

「まあ、いいや。」

俺は、興味が無いのを露骨に態度に表した。

『信じる信じないはお前の自由だ。だが猶予はそれほどないぞ？』

・・そう、お前らの時間単位で72時間。』

・・・・・!?なんだって？

第四話 夢で逢えたら

「たったそれだけの時間でまた死ぬのか？」

『・・・私の存在が消滅するまでの時間なのだ。我が消滅すれば、お前の精神と体は再び離れる。』

「・・・なんで、俺と契約したんだ？」

『興味が湧いたのだ。我らが出会ったあの世界は精神世界。我ら一族のようなうつろわぬものでもなければ、自分が何者かもわからず普遍的無意識に飲み込まれてしまう場所だ。』

「だが、俺は飲み込まれもせず名を言ってみせた。・・・だからか？」

『それもあるな。お前の持つうつろう心に惹かれたほうが強かったかもしれぬが。』

「うつろう心？」

『我ら悠久の時を生きるものは、心もうつろわぬ。だから、お前らのようなものの心は興味を惹かれるのだ。』

「・・・俺は天^{たかし}だ。お前は止してくれ。そういえば、あんたの名前は？」

『・・・我らの言語はお前・・・天には聞き取れぬ。好きなように呼べ。』

「そうか。その名に意味はあるのか？」

「”天の御使い”という意味だ。何故、そんなことを聞く？」

「呼び名を考えるヒントさ。・・・でも、運命めいたものを感じるな。」

「何がだ？」

「俺の名は天と書くからな。・・・ダジャレみたいなもんだけど。？そういえば、初めて会ったときは思考が読めたのになんで今は言葉を交わさないと意思疎通できないんだ？」

「ここは精神世界ではない。お前の夢の回線を借りている。契約は済んだが、初期設定をしなければ精神の共有はできないのでな。」

「初期設定？」

「大分、興味を持ってきたな。我と繋がりたいと念じろ、お互いが念じて回線を固定すれば初期設定は完了する。」

「まだ完全には信用も理解もできてはいない。だが、興味深いところもあったし一通り話を聞いてみようと思っただけさ。とりあえず、その初期設定をやってみよう。・・・たしか念じればいいんだな？」

「そうだ、細かい補助はこちらでやる。決して自らの名を忘れるな。・・・では始めるぞ。」

第五話 注意事項ダウンロード

全身に碑文のような模様が浮き出て光りだす。

『・・・ゆくぞ？自分を強くもて。』

「わかった。」

次の瞬間！何か大きなものに飲み込まれるような感覚に襲われる。

なんだこれは？とても深くて、暗い。

『意識を集中しろ！回線を固定するぞ。』

眉間のところから頭の中に何かが広がっていく感覚。・・・頭の
中がパンクしそうだ。

見たことも無い知識が夥おびただしいい量で流れ込む。

やがて、文字の羅列が形を成していく・・・。

『よく耐えたな。回線は固定した。稼働率は最小限にしてある。・・・そろそろ目覚めの時間だな。必要な知識はお前が望めば引き出せる。くれぐれも回線を開放はするな。』

「何故だ？」

・・・そこで目が覚めた。

必要な知識は引き出せるんだったな。・・・こめかみに指を当て、目を閉じて意識を集中する。

竜は普段は眠っている、だが俺を通して記憶は共有している。どうやら回線を完全に開放すると、精神の存在の大きさの違いから俺が侵食されてしまうらしい。

それを防ぐ為に、あいつは意識のほとんどを休眠させている。

あいつと俺の体に出る模様は法成式と呼ばれるもの。この世の森羅万象を司る理ことわりなのだそうだ。

俺は体に浮き出る法成式を見ながら、自分におきた現実を受け止めていた。

死を前にしたからか、竜と精神を共有したからなのか昨日とは違い、落ち着いて考えを巡らせることができる。

第六話 残り時間66時間

俺に与えられた時間はあと66時間。

今日は都合良く、休みだ。アパートの清掃をしよう。

「発つ鳥後を濁さず、だな。」

掃除をしながら考えていた。何故、あの竜は三日後に消滅してしまったんだろう？

そもそも何故、あそこにいたのか？・・・肝心な事は検閲をかけられて情報が引き出せなかった。

俺はこめかみに指を当てて、念じる。

「おい、竜。」

『なんだ？・・・くだらん事を考えているな？』

精神と記憶が連結している俺たちは想うだけで、意思疎通が出来てしまう。

いや、精神体の竜は都合の悪い思考は読まれないようにプロテクトを掛けているらしくサトラレ状態なのは俺の方だけだが。

「呼び名は必要だろ？」天の御使い”の意味の名ならアンジェだな。

「

『天使をもじったわけか。まあ、なんでも良いがな。そんなことを考えるより、限られた時間をどう過ごすか考えろ。』

「それはそうだけど、気になるだろ？」

『フッ、全く変わった奴だ。用が済んだならもう寝るぞ？・・・余計な事に思いをめぐらせるのはもつよせ。どうしてもよい事だ。』

そう言うと、奴はリンクを解いた。

「・・・自分の事もちゃんと考えてるさ。」

俺は携帯電話を手に取ると、メールを打った。

「お疲れ様、今夜都合が良ければ食事にいきませんか？・・・っと。」

送信画面を見届け、ため息がもれる。

「都合聞いてアポとれるほど、時間ないからなあ。」

メールの相手は鷺塚 京子。

半年ほど前に、何度かデートに誘って告白をしたが断られた。人を好きになったのは久しぶりだった。

これが最期の恋だと思うと、食事くらいしておきたいと思ったのだ。

「そういえば、彼女はタバコ嫌いだったな。」

あと63時間、禁煙も悪くない。俺はタバコとライターをゴミ箱へ投げ入れた。

今まで気にも留めなかった景色もなんだか感慨深く見える。

「夕日を見れるのもあと3度か。」

限られたものだと思うと、何でも価値があるように見える。
会社には連絡を取り、明日からも休みを取った。

第七話 それぞれの時間

暗く深い闇の中。

ここは全てのものが共有する世界。普遍的無意識の世界。

全なる一のこの世界で、自我を保つのは難しい。

その世界で、竜は夢を見ていた。

夢の中で、竜は無限に広がるかのような空にいた。自慢の翼で、雲を風を追い抜いていく。

まるで、大空全てが自分のものであるかのように。

……次の瞬間、竜は大地にひれ伏していた。強力な呪文に縛られ完全に自由を失っていた。

目の前には一人の男が立っていた。男は満面の笑みで何かを語りかけている。

だが呪文による強制力の痛みでまったく聞こえない。

……そこで夢は途切れた。

ゆっくり目を開けながら、竜はつぶやいた。

『お前か。どうりで嫌な夢を見るはずだ。』

目の前には、フード姿の男が立っていた。目深に被ったフードの中には白銀に輝く髪、その奥には紅い瞳が光っていた。

『そう言っな、友よ。……まさかとは思ったが、また起動していたとはな。』

『意外だったか？』

『まあな、この間の起動が最後だと思っていた。今更、無理に起動しても答えが見つかるまでに機能停止するんじゃないのか？』

『フツ、遂に答えまでたどり着けなかったお前よりは可能性があるさ。』

『・・・そうか、まあ早めに頼む。俺も時間が無いのでな。』

そついい残すと、男は消えた。

『頃合を見て、話さなければならぬな・・・。』

竜は呟き、また目を閉じた。

天はふと自分^{たかし}を呼ぶ声に気付き、声のする方向を見る。

「諏訪さん。」

「さん付けはやめてよ。タメなんだから。」

天は笑いながら京子を見つめた。
京子は天の雰囲気がいつもと違うのをなんとなく気が付き、大きく瞬きをした。

「どうかしました？」

「いや、なんでもないよ。」

なんとなく心を読まれたようで、照れながら答えた。

「さあ、行こうか。」

楽しい時間が流れていく。今までこんな気持ちで誰かと食事をしたことなど、きつと無かつただろう。

死を前にして、何故こんなに穏やかでいられるのか自分でも不思議だった。

いろんな話を話した。お互いの子供の頃の思い出や最近あった面白い出来事、・・・何故もつと早くこんなふうに話すことが出来なかったのか。

早足で過ぎていく楽しい時間。食事を終え、駐車場まで二人で歩く。ここでも談笑しながら楽しい時間が続いていた。

天は歩みを止め、彼女の前に立ち塞がる。京子は訳がわからずきょとんとしている。

すると、天は彼女をいきなり抱きしめた。

「今日は本当に楽しかった。ありがとう。」

天は言葉を続ける。

「やっぱり君が好きだ。京子ちゃんに逢えてよかったよ。」

そう言って彼女を解放する。

京子は状況が飲み込めず、大きく瞬きしたり視線をそむけたりしている。

「ごめん、気をつけて帰ってね。おやすみ！」

そう言っていると、彼女が車に乗るように促し駐車場を出るのを手を振って見送った。

見えなくなるまで見送って、自分も車に乗ってアパートへ向かう。運転しながら考えていた、自分が残された時間で何をすべきか。

アパートに着き、空を見上げると綺麗な月が出ていた。

第八話 クロックアップ

月を見ながら、缶ビールを飲む。
何から何まで、感慨深い。

このまま、穏やかな時間を過ごして逝けるならそれもいいかもしれない。

月灯りに導かれるように、散歩に出る。

街灯もまばらな道だが、今夜は月の明るさだけでも足元が十分見える。

残るは58時間、どこにでもある平和な日常とすれ違いながら河川敷にたどり着く。

人気のない土手に座り、月を見上げる。

「これが見納めかと思うと、感慨深いな。」

すると、何かもめているような声が聞こえる。・・・しかし、何かおかしい。

たしかに聞こえる。だが、声など聞こえないような遠いところから聞こえるような気がする。

『我と同調した影響だ。』
シンクロ

頭の中に竜の音がする。

「どういうことだ？」

『我と精神を連結した事により、お前の感覚も私のそれに近くなっ
リンク』

たのだ。』

「それじゃ、この声は……。」

『そうだな、ここから1500メートルのところに男が3人と女が1人。もめているようだな。』

「参ったな。……どうするか。」

『普段なら、見て見ぬフリであろうな。』

「どうせ死ぬなら、少しは役に立つか。」

耳を澄ます、おおその方角と距離が知覚できる。

『行くか？ 念じろ……。そこに早くたどり着く事をイメージするのだ。』

こんなに真剣に走るのは、久しぶりだ。……しかし、体が軽い。周りの景色がスローモーションのようだ。段々、色を失っていく。まるで、時間が止まった世界を自分だけ走っているようだ。

『着いたぞ。』

竜が得意気に言った。

「……どうなっている？」

目の前には男が3人、1人の女性を押し倒している。

男たちは状況が把握できずに困惑していた。
いきなり現れた天^{たかし}の存在を認識しきれない。

「まるで漫画だな。」

苦笑いをしながら、男達の注意を引き付ける。

ここは普段、人気のない場所だ。だからこそ、拉致した女をここに連れ込んだ。

これからというタイミングで現れたこいつは一体なんだ？

見かけは決して強そうではない、だが何か言い知れぬ不気味さを持っている。

三人は全員で天に向かってきた。

逃げるように目で合図をしつつ、逃げて追いかけさせる。

女が逃げていくのを確認しながら、自分の中に浮かんだ仮説を実証することにする。

・・・イメージだ。こいつらよりも早く動く。

脳に軽い電流が走るような感覚の直後、目の前の世界から色がなくなる。

男達の動きが止まる、いや仮説が正しいなら止まっているように見えているのだ。

やはり、そうか。俺は今、こいつらの知覚できない時間軸で動いている。

今、自分は常人をはるかに超える感覚と身体能力を持っているのだ。本気で殴れば、相手を破壊しかねない。加減をしつつ、急所をつけて感覚を解く。

色を取り戻す世界。男達は、訳もわからず倒れていく。

足早に現場を後にしようと振り返ったその時、背中に熱い感覚が。

「・・・加減し過ぎたかな？」

男たちの1人が背中にナイフを突き立てている。

第九話 適格者

「ふざけやがって・・・」

男はさらにナイフに力を込める。

傷口を抉^{えく}られるが、意外と痛くはない。

男はナイフを抜き、二度三度と天の背^{たかし}中を刺す。

ナイフを抜かれると、嘘のように痛みがこみ上げてきた。

刺される度に背中が熱くなる。

想定外の状況に集中できずに、されるがまま気が遠くなっていく。

次の瞬間、男は宙を舞った。

力が溢れてくる、傷も塞がっていた。

脳が驚掴みにされるような痛みが走る。・・・一瞬で我にかえって

痛みは消えたが酷い疲労感だ。

天は力を振り絞り、アパートまで帰った。

部屋に入ると、ベッドに倒れこむ。

仰向けに寝転がりながら、意識を集中する。

『いろいろな聞きたそうだな?』

竜は楽しそうに言った。

「当たり前だ。あれは何だ?」

『順をおって説明しよう、まずは感覚増幅^{クロックアップ}。』

「・・・もつたいぶりやがって。」

『これは我と同調^{シンクロ}した者が陥る感覚だ。全ての知覚機能と身体能力が増幅される。』

「なるほど・・・それでデメリットは？」

『よくわかっているな。増幅は体に負荷をかける。長時間は危険だ。』

「わかった。それでは俺が刺された時の感覚はなんだ？」

『あれは同調率を25%まで上げた状態だな。ちなみに通常は5%だ。』

「より多く力を引き出せる代わりに、精神の侵食も進むのがデメリットなわけか。」

『そういう事だ。まあ、必要がなければ無用な力だがな。』

「本当にそうなのか？」

『何がだ？』

「この力には意味があるんじゃないのか？お前は俺に何をさせるつもりだ？」

『・・・もう少し、機をうかがうつもりであつたが話したほうがいいようだな。』

俺はその澄んだ瞳で、こちらを見据える。

『お前は我に選ばれた。選ばれし者は試練を与えられ、乗り越えた者は答えを求められる。これが、今までの適格者の運命だ。』

「今までとは？俺は何か違うのか？」

『そうだな、今までとは違う。適格者は死ぬ運命の者の中から選ばれる。そして、適格者としての役目を終えるまでのつかの間の生を全うし、また死ぬ。・・・だが。』

「だが？」

『お前の前任者にイレギュラーがあつてな。奴は死んでおらぬ。』

「運命から逃れたと？」

『・・・違うな。保留にしているのだ、運命と答えをな。そして我自身の存在の制限時間も今回は大きな違いだ。』

「・・・つまり？」

『お前はまず、適格者としての真の資格を得るために奴に会う必要

がある。その上で、試練を乗り越え答えを出すのだ。私の活動限界時間までにな。」

「もしも、出せなかったら？」

「人類は緩やかに滅びる。」

「ちよつとスケールがでかすぎやしないか？」

「これは神の決めた趣向だ。」

「神の？」

「そうだ。その話はまたの機会にしよう。」

第十話 完全適合

天は^{たかし}ベッドに仰向けに寝転がりながら、考えていた。

アンジエから聞き出した情報はこうだ。

俺は死ぬ運命にあったが、アンジエに選ばれ適格者となった。

適格者は存在自体が”特異点”であり、適格者の出現に合わせて”試練”も現れるのだそうだ。

そしてその試練を乗り越えた適格者は”ある問い”をアンジエから受ける。

その答えにより人類の未来の方向性が決まるらしい。

それは誰かが判断するものではなく、答えをデータとして入力したのち導き出されるのだそうだ。

そのデータバンクはアカシックレコードという、この宇宙の過去、現在、未来の全てが記されているものらしい。

スケールがでかすぎて、いまいちぴんとこない話ばかりだ。

しかし、生きていられる時間があと50時間と迫っても特にやりた
いことが思い当たらない自分に情けなさを感じてもいた。

親と電話で話し、アパートを片付けて、好きな子と食事をした、。

するともう何も思いつかない。むしろ適格者として与えられた使命
にありがたさをおぼえるくらいだ。

仕事に追われるだけの人生。焦燥感と重圧感にさいなまれながら、
何も得ることなくただ、擦り減らすだけの人生。

その仕事から解放された今、自由なはずなのに何も無い。

与えられた使命を果たせば俺は、少しでも達成感を得られるだろう
か。

結局、誰かに与えられたものが自分を支える。自分ひとりでは自分を奮い立たせる事もできなかった。

天は意識を集中する。

竜に問いかける。

「アンジエ、聞きたいことがある。」

「前任者に会うのか？」

「そうだ。時間も無いし、まずは完全な適格者になる必要がある。」
「望め、さすれば道は示される。」

・・・意識を集中し、念じる。すると、強烈な眠気が襲う。

・・・目の前には扉があつた。

どうやら、これが前任者のいる部屋への扉らしい。

意を決し、扉に手をかける。

物足らないくらいの軽さでドアが開く。そこはどこか懐かしい部屋だった。

目の前にはフードを被った男がこちらに背を向け立っている。
気配でわかる、圧倒的な存在感。

「気をつける、奴は強いぞ。」

竜は天に忠告する。

「ああ、対峙しただけでわかる。」

「はじめましてだな。13番目。」

男は口を開く。そして目深に被ったフードをおろす。
白銀の髪と紅い瞳が印象的だ。

「13番目？あんたが12番目だったことか？」

天は自分の知らない何かを知る前任者から、できるだけの情報を聞き出そうとした。

『そうか、何も知らされていないのだな。お前が前に進む為には、まず俺を倒さなければならぬ。』

得意気に男は語る。

「そうらしいな。俺はまだあんたの名前も知らない。」

天は話に乗ってみる。

『俺は本来、最後の適格者であつた12番。そして歴代の適格者で唯一、完全適合をした適格者だ。』

男はなにやら不吉なことを言う。

「完全適合？」

また天の知らない言葉が出た。

『精神の侵食を受けずに竜の力を振るう能力だ。』

竜は常識だと言わんばかりに言った。

「どういうことだアンジエ、聞いてないぞ！」

天は動揺しながら、竜に食いつく。

第十一話 同調率50%の世界

男は両手を広げる。すると男のまわりに気流のようなものが流れた。少年漫画でよくあるオーラや闘気と呼ばれるそれそのものようだ。男は真っ直ぐこちらを見据える。

『さあ、いくぞ後輩。手ほどきしながら、俺の昔話でも聞かせてやるっ！』

まずい！そう感じた。・・・男が地を蹴るその瞬間、姿が消えた。音を取り残して、天に向かつて一足飛びに近づいてくる。

間一髪、感覚増幅が間に合い、男が放つ拳を視界に捕らえてかわす。

『へえ、やるな』

男は楽しそうだ。

「名前くらい教えてくれよ。先輩。」

天は虚勢をはりつつ、切り返す。

『名は捨てた。400年前、適格者となったその時にな。』

男は笑いながら答える。だが、どこか不機嫌そうだ。

「・・・もしかして、生きてて嫌な思い出でもあったか？」

天は冗談半分で鎌をかけた。

『だまれ！』

どうやら図星をついたらしく、男は声を荒げる。

「気に障ったか、すまないね。」

天はさらに動揺を誘うため、挑発した。

『見せてやる。最も真理に近づいた適格者の実力を。』

構えを取る男。するとその手の動きは緩やかにも関わらず、像が重なって見える。

「まるつきり漫画かよ。」

天はぼやく。

『力の差を体に教えてやる!』

踏み込んだかと思うと、強烈な肘を水月に打ち込まれた。

「かはっ」

天は思わず息を詰まらせる。しかし攻撃の手はゆるまない。

ほぼ同時のタイミングで右後方から延髄に蹴りが入る。

男はまだ、目の前にいる。だが、今たしかに後ろから蹴られた。気配も感じる。

すると今度は左後方から脇腹に膝が入った。やはり、目の前に男はいるのだ。

三人から流れるようなコンビネーションで突きや蹴りをくらい、手も足も出ない。

「このっ!!!」

天は意識を集中し、一気に同調率^{シンクロ}を上げた。

自分の体からも闘気がみなぎるのを感じる。それを一気に開放し、まわりに衝撃波を放つ。

『くうっ!』

まともに衝撃波をくらい、吹き飛ばされると三人いた男のうち二人の像がぶれて消えた。

「そんなに早くは幕を下ろさせないぜ。」

天は慣れない力に翻弄されつつ、虚勢を張る。顔には出さないが精神の侵食を受けているのをリアルに感じていた。

『調子に乗るなよ。まだ、我がドッペルゲンガーが破られたわけではない。』

平静を取り戻し、再び分身する。

このままでは勝ち目は無い。打開策が必要だ。

「アンジエ、俺にもっと力をくれ。同調率を上げるぞ!」

天は竜に力を求めた。だが、竜は消極的だ。

『今以上の苦痛と侵食を味わうのだぞ、それでもよいのか?』

竜は今一度、その覚悟を確認する。

「ここで負ければ、元も子もない。選択肢はないんだよ。」
天に迷いはない。竜もそれを理解した。

「ならば、一気に短期決戦でいくぞ！50%まで上げる！！！」
竜がそういうと、体中に力が溢れた。体を突き破って、飛び出しそ
うだ。

「ぐうつ……。」

髪が伸び、銀髪になっている。

「ほう、同じ同調率にしたか。」

男はまだ余裕の笑みを浮かべつつ、近づいてくる。

竜は念話で話しかける。

「完全な適格者でなくなった奴は50%までの同調率にはできても、私の承認無しには竜の力の開放はできぬ。」

「竜の力の開放？」

「そうだ、体現せよ。我が一族の力を。それこそが適格者の証だ。」
すると、荒れ狂っていた力が安定する。

瞳が紅く染まり、白銀の髪がなびく。体は体毛と鱗に覆われ、手や
足は鋭い爪が生えている。

まさに竜の力を体現するような姿。

今なら見える。男の分身の正体が。

分身も質量を持っている。原理はともかく、幻覚ではない以上三人
全てを相手にするしかない。

しかし、問題ではない。今なら、その動き全てが見える。

一歩で男の目の前に踏み込んだ。

天は男の目を見る。だが、驚くどころか何やら嬉しそうな眼をして
いる。

それが何を意味するのかわからなかったが、迷わず右手で分身ごと、
男をなぎ払う。

たしかな手応え、男は吹き飛ばされる。

第十二話 ユダの物語

『そうでなくてはな。』

男は尚も余裕の笑みを浮かべる。
たかし

天は迷う事無く、男の胴を貫く。

手応えがおかしい。これはハズレのようだ。

「そこかつ」

天は足刀で、背後にいる敵の頭を打ち抜く。確かな手応え。

しかし、蹴りは男は左手で遮られた。

『それで終わりか？』

男が不適な笑みをするのが早い。軸足をなぎ払われる。

続きざまに水月に肘を打ち込まれ、顎に掌底をくらう。意識ごと吹き飛ばされるような衝撃。

「このっ」

天は体勢を立て直し、けん制で蹴りを放つ。

あつさり避けられたが、距離は取れた。

精神の限界を迎える前に、目の前の男を倒すしかない。

天はまた前に出る。

男も迎え撃つ。毎秒、千発以上の突きや蹴りを撃ち合う二人。

色も音も置き去りにした、おおそ人間のうかがい知らぬ世界の中でぶつかり合う。

拳を交わす間に、ノイズのような男の記憶が流れ込んでくる。

「・・・なんだ、これは？」

『我らは今、同じ竜を介して力を行使している。我にも見えるぞ、お前の記憶がな。』

男は不敵に笑う。

その映像は燃え盛る炎から始まる。男の蹴りや突きを払いつつ、ノイズまじりで流れる記憶を覗くのは頭が混乱してくる。
はいつけ
礫にされ、周りでは群集が何かをこちらに叫んでいる。
炎は火刑の為の火あぶりの炎だ、時代は中世だろうか。

『なかなか刺激的だろ？お前の記憶はつまらんな。』

男はかつて”最も真理に近づいた12番目の使徒”と呼ばれる者を先祖に持つ一族の末裔として生まれた。

暮らしは決して楽ではなかったが、一族は固い結束で結ばれており回りからの迫害にも耐えながら生き抜いてきた。

男は名をイエフダーと言った。世間からは裏切り者と罵られながらも、一族にのみ語り継がれる伝承によれば、最も真理に近づいたからこそその大役を任されたという先祖の名を受け継いだ。

本家の嫡男として生まれ、次期当主としての自覚と才覚に満ちていた。

しかし、時代は男の人生を狂わせる。

一族の存在を疎ましく思っていた貴族に、一族の子供が因縁をつけられ殺されそうになる。

イエフダーは貴族ともみ合いになり、貴族が振りかざしていたサーベルは貴族自身の喉に突きたてられた。

即死だった、もはや貴族は息をしていない。

子供を帰し、イエフダーは貴族の遺体を木の下に埋めた。

その貴族は、隣の国でかなりの有力者である一族の四男だった。

家督も継げず、期待もされないその待遇に苛立ちをおぼえ、日夜八

つ当たりに時間を費やす放蕩貴族であったが、事故とはいえ死んだとなれば報復は免れない。

しかし、隠蔽は程なく最悪の形で露呈する。

当時、流行っていた魔女狩りにより自らの一族に嫌疑がかけられたのだ。

当然ながら、否定はしたが疑いはすぐには晴れない。

村を隅々調べられることになり、事故で死なせた貴族の兄である次男が率いる調査隊がやってきた。

その最中だった、野犬が掘り返した木の根元に白骨化しかけた弟を発見する。

着ていた衣服がなければ、判別がつかないほど腐敗した姿を目にして発狂するほどの怒りにかられた。

イエフダーの一族は全員逮捕された。父は貴族に弁明をしようとしてその場で射殺される。

望まぬ成り行きで、当主の座に着いた。

目の前で弄られる女と子供。イエフダーは血の涙を流しながら、騎士達に呪いの言葉を吐く。

抵抗むなしく磔にされ、足元の薪に火が灯る。

その様を見ながら、酒を飲み侮蔑の言葉を叫ぶ貴族達。

イエフダーは恨んだ。貴族を、運命を、人を。目の前に映る全ての者を呪いながら、絶命する。

・・・闇に包まれた世界で、竜と対面している場面を最後に映像は途絶えた。

第十三話 十三番目の適格者

適格者としての力を体現したような半竜半人の姿をした敵を前に、男は全く負ける気がしなかった。

400年の時間で培われた知識と経験、同じ適格者としての資質、竜に選ばれているという点以外は全て自分が上回っている自信がある。

その攻撃を捌きながら、目の前にいる適格者の記憶を覗く。

その記憶は、平和な世界のものだった。

親の都合で各地を転々とした、その土地に馴染んだところに次の土地に移り住む。

自分には故郷も幼馴染もない。

内向的な性格も加わり、まわりとあまり馴染めない人生を歩む。

空を見上げながら、物思いにふける事が多かった。

気がつけば、何もない人生。

感情を表に出すこともあまり無く、自分の考えを押し通すこともほとんどない。

答えの出ない自問自答を繰り返す毎日。

終わらない仕事に追われ、変わりたいと思いつつもがいているうちに死を迎える。

竜に話しかけられたところで、映像がぶれる。

『ぬるい人生だな。』

男はあざ笑いながら言い放つ。

「あんたに比べればな。」

天は迷い無く抜き手を繰り出す。
たかし

男は抜き手をなんとなく捌いて、尚も続ける。

『負けるはずもない。お前と我とでは全てが違いすぎる。』
存在する分身と共に流れるような連撃を繰り出す。

神経を研ぎ澄まして、受けきれない。このままでは負けると感じた天は防御を解いた。

右腕に気を練る。分身を含め三体同時に左腕でなぎ払う。

二体の分身は消え、本体に浅い一撃を浴びせる。

『それでは駄目だ。何度やってもな。』

男は余裕をみせながら言った。

だが次の瞬間、その顔は苦痛に歪んだ。

天が放った右腕の一撃が、初めて男を捕らえた。すかさず、左腕で体をつかむ。

力を込めて、右手で突く。

『ぐうっ。』

男がたまらずうなる。さらにもう一撃。

『このっ！』

男の突きが天の眉間を打つ。

天は突きを額で受けながら、双掌破を放つ。

男は吹き飛ぶ。

天は深く踏み込み、さらに追い討ちを狙う。

「アンジエ、一瞬でいい。同調率^{シンクロ}をさらに上げるぞ！」

『バカな、それ以上は力に翻弄されるぞ。』

「拳を打ち下ろす瞬間だけだ。」

『・・・どうなっても知らぬぞ。』

「ここでは終われない、くらえっ！」

天の体から炎のような力場が渦巻く。男のガードごと、打ち下ろした拳は男を床にひれ伏させる。

全身に激痛が走り、精神が引き裂かれるような感覚を味わいながら放った迷いなき一撃、それは勝負を決するにふさわしい一撃だった。

男は状況を飲み込めずにいた。自らの身に何がおきて、今自分が床に伏せているのか。

『ごふっ、同調率^{シンクロ}75%だと？』

男は立ち上がろうとするが、予想外のダメージに身動きがとれない。

「あんたは通過点だ。俺には時間が無いんでね。・・・」

それだけ言つと、天は膝から崩れ落ちた。

『どうやら、俺の負けだな。』

男は大の字に寝転びながら、清々しそうに言った。

第十四話 世代交代

男は寝転がったまま、話しかけた。

『おい竜、いるのであろう？』

すると、どこからとも無く声がする。

『私の意識を介して、形成された空間だ。当然であらう。』

竜は天の傍らに姿を現した。

男は竜を見るわけでもなく、空を見上げて続ける。

『精神の侵食を受けない我でも、50%以上の同調は恐ろしく出て出
来なかった。』

竜は何も言わず、ただ男を見据える。

『あの時、適格者として再び生まれた村に降り立った我は、その惨
状を見て我を忘れるほどの怒りにかられた。』

『・・・そして、適格者の力を使って復讐を果たしたな。』

竜が口を開く。その瞳はどこか悲しげだ。

『そうだ。怒りに任せて力を揮い、地図から小国を一つ消した。力
を持ち、どんな状況にさらされようと、自らを律する事ができる
か？それが私の試練だと知りながらな。』

男は目を閉じる。

『いくら壊しても、いくら殺しても、気が晴れることはなかった。

それどころか、後悔と恐怖にかられて、俺は逃げた。・・・適格者
としての使命からも、自分からも。』

『使命を果たすまでは、適格者が死ぬことはほとんど無い。契約は
一度してしまうと、それが履行されるまでは、お互いの承認無しに
は解除もできない。』

竜は少し機嫌悪そうに言った。

『そうだ、我は不死の存在となって各地を放浪した。．．．神に逢うために。』

男は竜の方を見て、続ける。

『まさか、竜に寿命があるとはな。誤算であつた。』

男が言うと、竜は首を振る。

『そうではない。決められた期限の間だけ、存在できるようになっていたのだ。その時が来ただけに過ぎぬ。それに．．．』

竜は一度口ごもる。男は不思議そうな顔で竜を見る。

『それに．．．なんだ？どうせ逢えないと言いたいのか？．．．やはり、この世界には神はもういないのだな？』

男が聞くと、竜は少し驚いたような顔をした。

『気がついていたのか？』

竜の言葉に男が答える。

『数百年の間、文献や伝承、遺跡に至るまで神に関わるものは調べられるだけ調べた。．．．そしてある仮説にたどり着いたのだ。』

『神が見捨てたわけではない。』

竜は男の言葉を遮った。

『過保護な親の存在は、子の成長を阻害する。だから、神はこの世界を離れ人が自律的に繁栄することを望んだのだ。』

『すると、適格者は人が神の思惑通りに成長しているかを確認める為のシステムなのか？』

男は尋ねる。

『そこまでは、神にしかわからぬ。だが、人がこの世界を脅かす存在となれば、存在を抹消される事もあるやもしれぬ。』

竜は半ば投げやりに話す。

『この世界が神の^{エレン}フラスコだからだな？』

男は竜の瞳を見据えて言った。

『どこまでわかつているのだ？』

竜は露骨に嫌な顔をした。

『さあな。まあ、神に逢えぬとわかったただけでも良かった。諦めがつくというものだ。・・・俺はこいつが見せる未来の方が興味が湧いた。今こそ俺の適格者の権限を全てそいつに引き継いで、十三番目を正式な最後の適格者にしよう。』

竜は不思議そうな顔で問う。

『よいのか？契約を解除すれば、お前は人の理を受ける。それがどういうことが分かっているのか？』

男は答える。

『十分に長く生きた。それに目的が果たせぬなら、この世に未練は無い。・・・さあ、やってくれ。』

『わかった。』

竜がそう言うのと、二人の男を囲むように陣が現れた。

陣の中で法成式が男の体から取り出され、天に移っていく。無数の碑文が絡み合い天の中へと入っていく。

『もうすぐ儀式も終わる。我との繋がりが断たれば、お前の意識もこの空間から離れる。そして限界を超えている肉体は塩塊となる。・・・つまり、儀式が終わると同時にお前は死ぬのだ。』

竜は男に話しかけた。男は満足そうに笑顔で答えた。

『わかつている。竜よ、お前に会えたおかげで面白い時間を過ごすことが出来た。礼を言う。元はと言えば我のせいだが、本来は存在しないはずの十三番目にどんな試練が与えられるか、何も無い筈はないと思うが。お前がどんな答えを見つけるか、我は先達たちと共に楽しみに見ている。その後輩に伝えてくれ。』

男はそう言い残すと、姿が消えた。

「まったく、最後まで勝手な奴だ。」
□

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9865c/>

この世の最果てで何を想う？

2011年1月8日02時54分発行